

い。一般にアジアの人口において若年層の占める割合は50%, 60%以上を占める国々が大部分であるから少なくとも12~3億の少年人口とみられる。この数字は世界の少年総人口の半分以上を占めているとみられる。ただし、この数字には社会主義国である中国、インドシナ三国、ビルマ、などが入っていない。いずれにしても、このような割合を占めるアジアの少年の非行問題について、これまで、あまり重大視する報告は日本など一部の国を除いてだされていない。その理由はまず第一に非行少年の数が絶対数において少ないということであろうし、非行そのものが現実の官庁統計にのぼってこないということによるのかもしれない。

ちなみに筆者が入手可能なアジア諸国で集めた少年逮捕者の数を列挙すると表一に示すとおりである。もとより、この数字はほとんど信用するに足るものではない。しかし、日本とくらべて問題にならないほど少年非

表一 人口10万人当りの少年逮捕者 ('79年)

インドネシア	11
スリランカ	30
インド	7
ホンコン	8 ('76)
マレーシア	25
フィリピン	81
日本	123

行が官庁統計ではとりあげられていないことだけは推察するに足るといえる。かつてアジ研において東南アジアにおける少年非行の比較研究をした A. A. G. Peters 氏はそのレポートの中で、少なくともこんにちの段階では少年非行は重大な問題ではない。将来に若干の増加があっても、いくつかのヨーロッパ諸国における割合のように増加するとはおもわれないといったことをかいている。^{*} たしかに日本、韓国、台湾、ホンコン、フィリピンなどで少年非行は大きな社会問題となっているが、アセアン5か国をはじめ、インドなどの欧大陸諸国においては現在のところ、社会問題といえるほどの重大問題とはなっていないようにおもわれる。

ただし、このことは前述したように、法制度、警察、裁判所、処遇機関などがいかなる態度で少年に対しているかの相違からくることがらであって、実質的に少年非行が比較上少ないという証拠にもとづいているわけではない。これらの諸機関の少年非行へのかかわり方や理念についての比較研究はきわめて重要な仕事であるが、この点については別の稿にゆづり、本稿においてはアジア

^{*} Comparative Survey of Juvenile Delinquency in ASIA and the Far East, by, A. A. G. Peters, p. 7.

アジアにおける少年非行の研究

菊 田 幸 一

Comparative Survey on Juvenile Delinquency in Asia

Koichi Kikuta

はじめに

アジアの人口は約23億といわれているが、このうち少年人口がどれくらいになるかは、少年法制で、その国の少年年齢を何歳にしているかにより異なるし、必ずしも正確な統計が出されているわけではないのでつかみにく

における（非行）少年がどのような社会的条件のもとにおかれているかといった観点を、とくに貧困、宗教、教育等の関連において考察することとしたい。

1. 貧困と非行

貧困が少年非行といかなるかかわりがあるかといった問題は、きわめて大きな課題である。少なくとも、これまでは貧困は非行の発生と密接な関連があると指摘されてきたが、こんにちでは、むしろ貧困よりも恵まれた経済環境から生ずる非行問題に関心がよせられている。ところがアジアの少年非行について考察する際に貧困とのかかわりを論ずる一つの仮説は、アジアの少年たちは貧困である故に非行を犯すことが少ない。むしろ貧困にある故に非行そのものが非行として扱ってもらえないともいうべきことに着目したいとおもう。

ここでいう貧困というのは個人生活の貧困に固定されたものではなく、むしろ社会全体の貧困そのものを前提とする。いうまでもなくアジアにおいても、個人的には巨額の富をもち、想像を絶する財力を所持する人間もいるだろうが、おしなべてアジア社会は貧困である。その貧困な社会における少年たちは貧困なるが故に非行を社会問題として扱う対象とされていないというべき点を問題にしたい。むろん、このことは別の言葉でいえばアジアの社会が、いわゆる近代化していないが故に非行が俎上にのせられていないのだということもできよう。

表—2 アジア13か国の1人当たりGNP,人口増加率

G N P (米ドル)		人口増加率 (’75~’78)
ホ ン コ ン	2,044 (’77)	6.4
タ イ	567 (’79)	3.2
マ レ ー シ ア	1,125 (’78)	2.6
シンガポール	3,787 (’77)	1.2
インドネシア	304 (’78)	2.4
フィリピン	510 (’80)	2.8
台 湾	1,720 (’79)	1.9
イ ン ド	150 (’77)	2.1
スリランカ	190 (’79)	1.6
バングラデシュ	90 (’77)	2.5
パキスタン	248 (’77)	3.0
韓 国	1,597 (’77)	1.6
日 本	6,797 (’78)	0.9

注 アジア動向年報による。

むろん、貧困はアジア特有のものではない。しかし、いわゆるGNP指数で国民の生活レベルを比較することの無意味なことを承知のうえで世界各国の国民所得（国民統計要覧、1980年）をみると、一人当たりの所得が年間

200米ドル（’77年）を下るのはアジアの国を除いてない。しかもアジアの人口増加率は年平均2.4%であり、これは先進諸国の倍近い率であるから（表—2参照）、アジアの一人当たりの所得増に比較して人口急増がいかに大きく、かつ貧困がこのままでは永遠の課題であるかがわかる。

とくにインド、パキスタン、バングラデシュをはじめインドネシア、スリランカ、タイ、フィリピン等のGNPは欧米諸国のどの国にもみられないほどの低所得である。これらの国々における少年たちの貧困さについて具体的にふれることは単なる旅行者にすぎない筆者では力不足であるが、貧困を語るとき、なんといってもインドの乞食をあげざるを得ない。堀田善衛は「インドで考えたこと」の著述のなかで「牛といっしょに街頭で眠り、街頭で食べ、街頭で歯を抜き、街頭でひげをあたり、街頭で痛み、患い、そしておそらく街頭で死ぬ」（同書146頁）と表現している。それでもボンベイには毎日1,500人の人びとが生活のため到着する。ボンベイはかれらを受入れる余地はなく、人は空港道路のわきに小さな堀立小屋をたて歩道には10万人の人間がねていると報告されている。街の中の少年乞食はアカでまみれ、ハダシで歩き、眼をそむけたいようなむごい姿である。むろんインドだけではない。パキスタンにおいて、さらにバングラデシュにおいて形容を絶するような貧しさと混雑、限らない乞食がいる。

朝日新聞（昭和56年9月7日朝刊）によると国連社会理事会は欧米諸国では16歳以下の児童労働人口の比率は3%程度であるが、インドでは25%、タイでは28%の高率であるとする報告書を提出している。同報告によると幼児期の労働によってゆがみをもった子どもは、だんだんまともな仕事につけなくなり、麻薬密売、窃盗、売春、密貿易といった悪の世界に落ち込んでいくという悪循環を生んでいるという。しかし現実には過酷な労働につけるのはまだ恵まれている。麻袋を背負って街中をうろつき廃品を集める少年の姿はあわれであるが、少年だけでない。インド国民の半数以上が貧困以下の生活であり、貧民窟に暮している家族にとり1日1.5ルピー（約42円）を稼ぐためには欠かせないのが現実である。インドをはじめパキスタンやバングラデシュでは乞食に金を恵むのは同じくらい貧しい者がさらに貧しい者に与える。こうした風習自体が金持ちに免罪感をもたせ底辺社会の変革を妨げているのだとする批判もあるが論理ではなくインドにおける常識なのである。

フィリピンでは中学課程2年までが義務教育であるが90%までが義務教育を受けてもその80%は途中でやめてしまう。学校へ行くことは生活の破壊につながるのだ。

学校へ行かずに街で新聞売りをし、ガムを売ることによって彼らの生活がなりたっている（1日100円ぐらい）。ここでは少年たちは「未熟なおとな」なのではなく、子供ではあるけれども、それなりの文化と独立した社会、生活をもっている。それをおとなも認めている。むしろ、子供たちにいい服を着せ、目と耳から教え込み、肥満した少年を育てるだけが教育でないことはいうまでもない。アジアにおける少年乞食たちは仲間同志のナワ張り争いもあるし、売上げ高の計算もしなければならない。少しでもゴマかすことで利益をあげる工夫をしなければならない。街中でニセ銀貨をうり、クツをみがかせようと、しつこく言い寄る。旅行者から物をかすめとること自体が少年たちの生活なのであって、そのこと自体は下品でもひくつでもない。それらすべてが自分たちの社会であり、自分の能力を存分に発揮する場なのである。それは多分、自分の親たちも現にやっていることである。そこには大人も子供もない。たしかに、ここには日本のような校内暴力も暴走族もない。

しかし、それでもなお、われわれは、このアジアの現実を単に精神主義で是認する論理に組するわけにいかない。子どもの乞食はおとなの犠牲である。先進諸国の教育において生まれたヒズミを非難する一方で、アジアにおける乞食少年が正当化され、そこに見失われた教育の本質のあるかのごとき指摘は厳として排斥されなければならない。人間らしい環境が物質文明を意味するわけではないが、資格ある教育者が教材を用いて教へ込むことのできないところに近代的教育は成立しない。

アジアはヨーロッパ大陸にくらべ自然環境に恵まれ、ほんらいは豊かな地帯である。こんにちの貧困の原因には多くの解明を要するであろうが、重要な原因の一つがアジアのうち日本とタイを除いてすべての諸国がかつての植民地であったことを指摘せざるをえない。1920年まではインドは食糧においても小麦の輸出国でさえあった。かつての宗主国イギリスがインドから徹底的に搾取したことは知られている。この搾取はイギリスの去ったこんにちでも厳然としてつづいている。いわゆるイギリス資本による経営代理会社制が利潤のことごとくをイギリスに流入させる仕組みとされている。

このことはインドだけではない。アジアの多くの国々において先進諸国による援助と称する型での搾取はつづいているし、所得分配の不平等、それを可能にしている複合社会（多人種社会）の背景もアジアの貧困を救いたいものとしている。

アジアの少年たちを貧困から救うこと、それは非行を非行として扱うような社会をつくり出すことにある。アジアの少年たちには非行が少ないのではなく、非行を非

行として取上げてくれない社会状況におかれているのである。

2. 宗教と非行

宗教と非行のかかわりについて述べることは貧困と非行の問題以上に困難かつ大きな課題である。それでは、なぜ、このような宗教とのかかわりを考えるに至ったかをまず述べなければならない。それは、前述したようなアジアの悲惨な貧困をみるにつけ、このような貧困のうちにも国民が力強く生きている根源は何なのかといった単純なものを宗教との結びつきにおいて考えておく必要があるようにおもえるのである。

ただアジアの宗教といってもインドを代表するヒンズー教、バングラデシュ、パキスタン、マレーシア、インドネシアのイスラム教、タイ、スリランカ、日本、韓国、ホンコン等の仏教、フィリピンのキリスト教といった世界三大教がアジアを占めており、さらに土着の宗教もあり、ある国が一つの宗教で独占しているわけではない。とくに東南アジアでは、たとえばシンガポールでは中国系（仏教）、マラヤ系（イスラム教）、インド系（ヒンズー教）といったように人種によって宗教がはっきり分かれる国もある。日本でも統計によると仏教（46%）より、その他の信徒（キリスト教を含む）が優勢である。

このようにアジアはまさに宗教のルツボといわれるにふさわしい文化的風土をなしている。もともと先史時代からの原始宗教があり、そのなかへ仏教やヒンズー教が流れ込み、後になってキリスト教が入ってきた。その伝播の仕方も、むしろ国により異なるが、アジアで特色のあるフィリピンのキリスト教普及率の高さは、同国が16世紀いらいスペインのカトリックに支配されたことによるが、インドネシアやマレーシアのようにヒンズー教が根をおろしている国では他の宗教の入り込む余地はない。同じくアジア全体からみれば後から入ってきたキリスト教はアジアにおいてはこんにちでも布教活動がつけられているにしてもアジアを代表する宗教とはなりえない。逆にいえば、それほどアジアにおける先発宗教は根強いものがあるといえよう。

アジア13か国（本稿で取上げた諸国）の人口の割合からすればインドのヒンズー教徒（推定約4億4千万人）が圧倒的に多数を占める。ヒンズー教はイコール、カースト制と不可分の関係にある。というよりヒンズー教自体がインドの民族宗教であり、インドではキリスト教徒やイスラム教徒でもカーストをはなれての存在はありえない。そこで、まずカーストと非行の結びつきについて考えてみたい。

むろん本稿ではカーストについても詳論する余裕がない。専門的な他の著述にまかせるはかないが、カーストは世襲的な分業関係で結ばれているヨコと儀礼的な上下関係のタテの相互関係から成立っている。この制度が結婚・食事・職業のすべての分野に規制を加え、自己のカーストを守るための手段とされている。法律上は1872年の特別婚姻法によりカースト外との婚姻を認めているが実際はカースト外の者との結婚は許されず、これに反した結婚はパンチャーヤト（長老会議）にかけられカーストから排除され、そこに住むこともできない。逆にこうした規制に従っているかぎり最低の生活は保障される。

ヒンズー教のきびしい身分制と職業制限はカーストを通じ村や町をこえた地域社会に強く結びつけられており、この規制を守らない者は自殺するに等しいものとなる。逆にカースト内では犯罪や非行も警察へ通告しないで処理される。とくに警察官が異教徒であれば仲間を売するような通告はありえない。しかし、もっと悲惨なのはよく知られるカーストにも属さないアンタッチャブル（不可触民）に対する私刑である*。

インドにおいて生きるということはカースト制のもとで現世的に生きるか、この世界から離脱して現世放棄者となるしかない。フランスの宗教社会学者ルイ・デュモンは「階級制の人間カースト制度の研究」のなかで、この現世放棄者となるというのは特定の宗派の師につくか、僧院に入りカーストから脱出するかであるとかいている。これがヨーロッパでいう「個人」にもっとも近い観念であるともいっている。いうまでもなくヨーロッパにおける個人は現世内での個人である。インドではそれが現世内では達せられない。人間は現世においてのみ個人がありうるものであり、それ以外のものではありえない。たとえ現世の個人が差別と苦悶の個人であっても、まず個人であることから出発するところに人間の存在がある。それがインドでは不可能である。しかし、このような観点はわれわれ他者の側面的見方にすぎない。インドの人間は今も人間として生きている。それを可能にしているのは宗教の力であろう。ヒンズー教は現世の人生より来世の人生に多くの関心をよせている。こんにちの不可触民は来世においては一段階上になることを信仰の基本としている。

ガンジーはカースト制に反対したが、ある時期には積極的に援護さえしている。ガンジーにとっては「人間存在の価値は、個人的な自由を伝統的価値から切り離すことによってではなく、その伝統的な価値をストイックに受容するところにしか存在しない。いわば階級〈人間〉の差別を、義務の強制力によって包摂し、かくすることによって神の前の平等と自由を得ようとする態度があっ

た」（山折哲雄・インド・人間、223頁）と解されている。いわゆるガンジーの無抵抗主義がその背景にある。ガンジーには近代は腐敗するものであるとする根本思想があり、西欧近代主義ではインドの土壌から生まれたカースト社会を改変することはできないとする体験からくる信念があった。

筆者はガンジーの思想を批判する資格に欠けるが、晩年におけるガンジーと会議派および合理主義ネルーとの対立はこのようなところにあったことは周知のところである。独立後のインドは憲法でカースト差別を禁じ、不可触民たちの地位向上のための立法や行政による社会改革を試みてきたが、日常生活におけるカーストの壁は絶体的なものである。上級カーストは自らの権力を守るためにこのカーストを利用したし、イギリスの植民地支配においても徹底的に利用された。ガンジーは不可触民をハリジャン（神の子）と呼び、差別を訴えたが究極的には否定することはできなかった。こんにちの近代産業化のもとでは人口の都市集中化と交通の発達でカースト差別を緩和する要因の一つとなりえても、こんにち厳然としてカースト制は存在する。それはインド社会それ自体であるとさえいえる。それは宗教を背景とした一種の麻薬のようにおもえる。アジアにおける近代化を妨げている麻薬だといえ言ひすぎであろうか。この麻薬がある限り、ここでは少年の非行も非行として俎上にのせる土壌はない。

カーストについて多くの紙面をとりすぎたようである。アジアにおける第二の大きな宗教、イスラム教はどうか。ヒンズー教が多神教であるに対し、イスラム教はマホメットを神とする一神教であり、ヒンズー教が業と輪廻を教義とし、階級制をとるに対し、イスラム教は信仰にはげめば希望がもて、身分意識を否定するなど根本的相違はあるが、礼拝をし、こころよく喜捨をし、約束を守り、不幸や困窮にたえて行く人こそ本当の宗教心ある人と説く。イスラムは人間平等を説くが現実には支配者と被支配者がおり、貧富の差ははげしい。この意味においてヒンズー教とその背景はなんら異なるところはない。

さて、仏教はどうか。仏教の教える善因善果、因果応報も支配者の被支配階級への絶対的服従の手段と化していることは否定できない。因果応報思想は他人への親切、目下の者を助ける情熱とされているが、逆に他人に害を加えることは来世において地獄へ落ち込むことを意味する。仏教王国タイに犯罪が少ないのはこの影響かも知れないが、他方では、たとえ犯罪を犯しても前世にお

* 最近の報告として山際素男・不可触民（三一書房）参照。

いて功德をつんできた者は結果として現世において地位を得ているのであるから非難できないといった観念をうえつけている。支配階級も被支配階級も、このような因果応報の観念ですべてを解消し、ただ平穩にいることが最良の方策であるということを教え込んでいる。ここでもまた宗教が貧困と不平等と犯罪抑圧のために利用されている。

前述したように、アジアにおいては土着の宗教、つまり精霊崇拜がいぜんとして大きなウェイトを占めている。しかし、こんにちの国家形成のもとでは精霊崇拜は単なる村落の一部にしか通ずるものではない。国家の形成と民族の統合のためには、かような土着の宗教では用を足さない。そこにヒンズー教や仏教が支配者側の国家統一の手段として伝来するにいった。それは同時に支配されている者の不満の救済の役割を果たした。これが、こんにちでは村人の精神的よりどころとなり、寺院によって寄進する者は村の生活において発言力を強くした。宗教による村人支配であり、国家の統治手段ともなった。宗教が個人としての自覚をマヒさせる力となった。アジアの近代化はかくして阻害されている。

最後に、キリスト教がアジアにおいて、いかなる役割を果たしたかについてふれておきたい。アジアの植民地化は、同時にキリスト教によるアジア支配の歴史であったといわれる。しかしキリスト教的西欧主義はフィリピンを除いてはアジアにおいて浸透しなかった。これまで述べてきたイスラム教、ヒンズー教、仏教がすでに定着していたからであろう。むろん、これだけでなく、キリスト教がその布教においてミリタントであり、ヒンズー教や仏教が自己沈潜的であるところに、アジア人がキリスト教に反発を抱いていることも、その原因だといわれる(東南アジア教育史, 世界教育史大系 6, 306頁)。

たしかにイスラム教徒はキリスト教徒に対する心理的抵抗感が強く、西欧の近代教育の学校へ子どもを送ることを忌避する傾向がある。マレー人が宗教に対し真摯な態度をとりつづけていることが、この国の近代化を遅らせている。これに対し中国人を中心とする仏教、儒教の宗派は比較的抵抗感なく異教徒と接触してきた。このため中国人はどこでも旺盛な適応性を示している。アジアにおけるイスラム教や土着の宗教が不幸にも西欧文化のキリスト教を受入れることができなかったためアジアの近代化を遅らせた。キリスト教の近代的個人主義がアジアに定着しなかった。したがってアジアにおいては少年非行は問題にすることなく沈滞している。それは同時にアジアが近代的個人主義に目覚めていない証拠である。アジアにおいて少年非行の増加することが、アジアが近代化しつつあることを示すものであるということとはでき

まい。むろん、ことはそんなに単純ではない。他の重要な問題である少年に対する教育のあり方についてつぎにふれておきたい。

3. 学校教育と非行

アジアにおける学校教育は宗教がキリスト教布教とともにヨーロッパとの接触を余儀なくされたのと平行して、ヨーロッパ方式の学校教育が導入されるにいった。日本はとくにアジアの中でもいち早く欧米先進国を範とする教育方式を取り入れ世界でも、もっとも教育の普及した国となった。アジアにおいても民族の独自性を守りつつ西欧的教育導入を急がなかった国は、いわゆる学校教育の普及は遅れており、たとえば文盲率の高さは同時に国民の生産性を低くし、それは同時に生活そのものの低さと連なるといった現象を生ずるにいたっている。

他方では、果して西欧方式の学校教育が少年たちの人間的幸福に結びついたものかどうかの点について、こんにちの日本における学校教育のもつ問題点をあげ疑問視するむきもある。文盲率を低くすることが学校教育の最低の目標であることはいうまでもないが、学校教育によらずとも自由に何か国語も話し、文字のよめる人もいる。学校教育は少年たちにどのようなかわりをもって

いるのかを検討しておきたい。

はじめに参考までにアジア13か国の義務教育の年限を表—3 国別にみた義務教育年限

国名	義務教育年限
ホンコン	中学3年
タイ	中学3年
マレーシア	初等7年
シンガポール	なし、小学6年まで無償
インドネシア	小学6年目標('84)
フィリピン	小学4年、中学2年
台湾	中学3年(9年間)
インド	中学2年(8年間)
スリランカ	中学3年
バングラデシュ	なし
パキスタン	小学6年
韓国	国民学校6年

調べたのが表—3である。こんにちでは中学3年までを義務教育としている国が多数であるが、インドネシアのように義務教育制のない国もある。この国が遅れをとったのは、東南アジアで学校教育の必要が生じたときに植民地支配という不運に見舞われたという事情もあるが(世界教育史大系 6, 20頁)、事情はもっと複雑である。第一に、インドネシアに限らず、イスラム教国において

は聖典コーランを他国語に訳すことを認めないのでアラビア語で意味はわからなくとも読経し、礼拝の仕方などは伝承されたものに従った。第二に、オランダ語を習得していなければヨーロッパ人学校へは入れなかった。第三に交通の未発達と海洋と島嶼の国では封鎖的生活圏を構成しており多言語をもつ。この多言語のため民族的団結がおくれたことはアジアの国々の一つの特徴である。

マレーシアでも子供は午前中は国民学校へ通い、午後は塾でコーランを学ぶという生活を週5日つづけている。しかも子供を国民学校へ出すには年間5ドル（第1学年）ないし26ドル（第6学年）の教科書や、一着5ドルの制服がいる。貧困な生活において、この出費は耐えがたいものであり、すべての子供が教科書をもっているわけではない。

むしろ、さきにあげた義務教育制のしらべもその普及状況は大きく異なる。たとえばタイにおける都市と農村、地域の貧富の差ははげしく初等教育の普及状況からみると、ある地区で85%あれば他の地区では18.5%という地区差がある（津田玄一郎・アジアの人間の世界、158頁参照）。インドでもデリーでは75%であるに対し辺境では3.7%といった格差がある。とりわけ僻地における教育は困難をきわめている。またインドのように州ごとに母国語を異にする場合はその格差は是正はいっそう困難である。小学校入学後40%ぐらいの退学者の出るのはめずらしくない。タイでも小学校1～4年の落第率は20%（1964年）、とくに農村では30～40%に達している。とくにインド、パキスタン、バングラデシュ、ビルマ、ラオスなどの落第率（退学者）が高い。その原因には貧困が第一の理由としてあげられている。

学校教育の充足率の点からみると、一般に義務教育年齢の低い国は国民所得が低い。ヨーロッパ方式の学校では、まず教師が必要であり、その教師を養成する学校が必要であり、さらに教員養成のための高等教員を終了した教員が必要である。そのうえ学校の建設と用具を具えるには、まず貧困を解消しなければならない。いずれにしても巨大な財政的負担を要する。貧困であることが学校教育を貧弱にしている。

しかし、一方では、たとえば、インドでは19世紀はじめベンガル州だけで初等学校が10万もあり、人口400人につき一校の学校があったといわれる。それが植民地支配で衰退した（世界教育史大系6参照）。この指摘が正しいとすれば、植民地支配が愚民化作用を施したといえる。インドでは英語を学習した者のみがエリートであり、上級学校はすべて英語でなされていることを考えると、英語を話せない大衆に対する学校教育が衰退した事情を知ることができる。

このことはインドに限らず、他の若干のアジアの国についてもいえる。せっかく文盲一掃の努力を重ね、自国語の読み書きを覚えても、それを利用する機会が乏しく、習得した能力もやがて消失してしまう。そのためには経済的・社会的・文化的条件が伴わなければならない。富の平均化、工業化、都市化、国民意識の高揚などが平行しなければならない。単に教育の普及のみで足りるものではない。たとえ無償の義務教育であっても、7～8歳になれば自分で稼がねばならない多くのアジアの少年の貧しさが基本的に問題である。

ところで、ヨーロッパの教育は知的であり、読めることが教育の尺度であるに対し、アジアの教育は文盲率の割合で評価すべきでないとの考え方があつた。たとえばインドでは教育とは人間が話すことにより教え込むことにあり、「聞く」ことが尊重されてきたという。人間と人間のふれ合いが重大視されてきた。ガンジーは読みかきは教育の本質ではないとし、イギリスにより導入されたヨーロッパのエリート教育を批判した。インドでは石盤をもって学校へ通う少年たちが現在でもみられる。たしかに知識の伝授だけが教育の本質でないことはいうまでもない。それは、わが国における、こんにちの進学中心の詰め込み教育の実体をみれば自ら明らかである。むしろ、こんにちの学校教育のあり方が少年たちを非行に追いやっているとの指摘は、わが国についていえることを射ている。

しかし、筆者はこのことが現在の日本を除くアジアの諸国の教育について当てはまるとはおもわないし、当てはめてはならないとおもう。先きにも述べたようにヨーロッパ式学校教育のみの先導する社会に弊害が生ずることは認められても、識字能力のない人間は経済的、物質的繁栄を享受する機会がない。西欧型教育は、ある意味では人間を現実的、利益追及的、合理主義者に仕上げていくという弊害を伴うが、それは教育のあり方の問題であつてアジアにおいて西欧型教育の普及を必要としないということではない。現代における文化は世界のどの国の人間も享受する資格がある。学校教育は石盤ではなくエンピツと紙で専門的教師が教え込むべきである。アジアの多くの国においては、そのあたり前の教育が未だに達せられていない。たしかにアジアのどの学校においても日本でみられるような登校拒否や校内暴力はない。しかし、そのような問題も起せない現状にあるのがアジアの少年たちである。

ま と め

アジアはヨーロッパの石で代表される自然とくらべ緑で代表されるごとく自然に恵まれている。自然との闘い

ではなく、自然との調和の中で人間は工夫をこらして生きてきた。そうした背景にあってアジアはおしなべて戦闘的でない。しかし近代化の波はアジアの農村にも急速におしよせつつある。タイにしてもインドネシアにしてもバンコックやジャカルタはもはやアジアそのものではない。同じく農民にあっては文明の利器が生活のテンポをくるわせ、自然とともに生きるという伝統的価値意識はもろくもくずれつつある。農民もこうした文化の波及に対し、いつまでも自然のなかで忍従し、貧しい生活を甘受したいと願っているわけではない。望むらくは自然との調和においての近代化を待っている。しかし、ある国の国民性だけがこのスピードを調和のうちに消化できるかどうかは疑問である。調和への努力は必要であろうが、不調和をおそれてアジア人だけが、いぜんとして自然のなかで原始生活を強いられていることが是認されることはない。公害、物価高など数限りない弊害があるにしても、カラーテレビをみたいという人間の夢は等しく享受されなければならない。アジアは自然に恵まれており、争いを好まない人間である故に、近代文明からはなれ、自然とともに静かに原始生活を送ることが幸せであるということにはならない。自然を自然のまま放置することは幸せに連なるものではない。自然は、あるときは洪水となり農地を流し、生命を奪う。近代科学は自然に向い災害から人間の生命を守ることができる。自然を人間の生存に変えることによってのみ人間の幸せがある。

近代化は人間を悪くする。非行についていえば必然的にその増加をもたらす。しかし、たとえ非行は増加しようとも最低限の自然との調和において人間の生活は近代化されなければならない。非行の抑制とその措置は近代社会の病気のひとつとして近代社会においてのみ措置されなければならない。アジアにおいて非行がいぜんとして問題とされていないのは社会が近代化されていないからである。これは別の点でいえば近代化—法律による—による援助をうけていないことを証拠づけている。非行は非公式的な宗教、慣習といったコントロールによるのではなく、社会問題として顕現されなければならない。重ねていえば、アジアに少年非行の少ないのは貧困のため、宗教という一種の麻薬の力のため、教育をうけていない無知のため非行そのものを犯す原動力に欠けているためであり、非行を非行として社会問題にするに至っていない非近代性にある。アジアに少年非行の増加することがアジアの人的目覚めを証拠だてるものであるともいえるべきではなかろうか。